ユニラブ

宇風終友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユニラブ

【Ｎコード】
Ｎ６８４０Ｋ

【作者名】
宇風終友

【あらすじ】
主人公は傘マニアの高校二年生。
雨降りの日曜日、友人との待ち合わせで図書館へ向かう。
そこで、図書館を出ようとした時、持ってきた傘を持ち去る少女を発見。
なかなか捕らえられないがついにその少女を捕獲。
そこから二人は親しくなっていき……
プロローグまで

冒頭　プロローグ

壱

六月某日、日曜日、午前八時三十分ぐらい

「起きてくださぁい、ご主人様〜」

今日の俺の一日の始まりは、どうやらメイドさんによる目覚ましのようだ。寝ぼけたままでメイドさんが目の前にいる実感がわかない。でもうれしい。

「お……お〜今起きる」

緊張してるのかは自分でもわからないが、少しつまりながらも返事を行う。でも布団からは出んぞと布団により深くもぐる俺。

布団から出る気がないのがわかったのか、メイドさんは次の言葉を紡ぐ。

「早く出ないと抱きついちゃいますよ〜」

うれしいっ！　是非っ！　と言いたいが体裁を保つために一応断ろう。

「わかったからいったん離れてくれ」

ふぅ……本音が出なくて良かった。安堵、安堵。しかし起きる気はなし。嘘ばっかり言ってるな。

ちなみにメイドさんは俺のベットに腰掛けて俺の顔を覗き込むような体勢。結構近いのよ顔。

「嘘です。また眠るつもりでしょう」

すぐ見破られる。残念。じゃあ起きよっかなと思い、体を起こそうとする。しかし、その行動は俺の望んだ形で妨害される。まぁ次の行動によって。

「嘘つきにはこうです。えいっ」

ぎゅってしてきた。ちょっと体起こしてたから完璧なハグデスネ。ドーヨーしてる。まったく動けない。顔あたりに血液が集中してる気がします。

「っ……つぇっとぉ……は、なれ……てください」

うまく舌が回らない。聞き取ってもらえただろうか？　思わず敬語になってる。

「ふふん、起きるんですか？　では離れましょう」

得意げに俺に回していた手をほどき体を起こした俺の正面に座る。悪戯な笑みがひたすら可愛い。俺はこんな可愛い子にハグされてそれを拒否したのか……後悔の念がよぎるなぁ。

「では、おはようございますっ！」

メイドさんは笑顔であいさつしてくる。自分で赤面しているのがわかる。顔中が熱いもの。おそらく真っ赤なその顔であいさつを返す。

「おはよう」

弐

まあコレがこの日の朝のやり取り。いつもじゃないよと歩きながら自分の中で弁解し始める。

向かう先は図書館。十一時からそこで待ち合わせがあります。肩から必要な物を入れたバックを下げて目的地を目指し進んでいく。

今は起きてから二時間ちょっと。朝ごはん食べたり、着替えたり、顔洗ったり、エトセトラ……。

じゃあ朝のやりとりについて弁解をしましょう。

あの子は俺の家の同居人。

関係を説明すると俺の姉貴の彼氏の妹。俺と姉貴の二人暮しに（姉が独立しました）彼氏と妹が舞い込んだ形。ドキドキの四人生活を送ってます（そういう意識は自分だけか）。

同い年の高校二年生。さらに同じクラスだった。名前は橋原硯（ハシハラスズリ）。

なんでも両親が書道家だったそうね。
　メイドさんとかは趣味なわけで日によってキャラが変わります。長身、美麗でモテコちゃん。いわゆる美少女です（キャラに難ありか？）。他の男子と仲良くしてても妬きませんよ。これにて弁解しゅ～りょ～。

　そろそろ図書館が近づいてまいりました。家から歩いて十五分の距離。ちなみに雨降り。雨脚は弱いけど停滞前線やら梅雨前線やらで雨は長引きそうです。そんなこんなで傘差してる。服は普段着なのでぬれてもあんまり気にしない。
　この傘のメーカーはアレンベナーの『ツキアカリ』と言う傘。お値段なんと五千八百円。アレンベナーは有名な傘のメーカーで国内の傘の売上の二十八％を占めている。まぁなんです、俺が傘好きってことです。
　向かう図書館は最近出来た（具体的には去年の三月中旬あたり）国内有数で、県内で最大の市立図書館だったと思う。三階建てで読みたい本ならほとんど手に入る。パソコンも使えて勉強するためのスペースなどが十二分に整っている。待ち合わせ場所に不覚なしってところでしょうか。

　ここまできたところで図書館の敷地内に侵攻する。
　ただいま十時四十二分二十三秒。少し余裕あり。少しだけど中で本巡りでもしてようかな、と思い図書館の施設内に入る。
　傘立てに傘を入れよう。もちろんロックつきの方に……しようと思ったけど、
「あれ？」
　思わず声をあげる。
　コインがない。財布、家に置いてきちゃったか。そういえばバッ

クに入れた覚えないしな。
まぁ、お金つかうようなことは今日はしないと思うし。
しょうがない、ロックなしの無料の傘立てで我慢しよう。盗っていくようなやつはいないだろう。仕方ないので無料の傘立てに傘を入れる。出来ればこの傘が高額って気がつかないでほしい。
傘立てを通過し一応待ち合わせ場所に行ってみる。予想通り待ち合わせ相手はいませんでした。
あの人は時間にルーズなんです。なので、計画通り本巡りをしてみる。まぁ本巡りって言っても図書館内をウロウロするだけの足の運動みたいなものだけど。
まぁそんな感じで約十五分間ウロウロした後、待ち合わせ場所へ向かう。
着いた頃の時刻は十時五十八分五十七秒もう少しで待ち合わせ時間に到達。しかし相手は五分前行動や時間厳守という言葉を知らないようで一向に現れる気配なし。今までもこんな感じだし慣れてるっちゃ慣れてる。まぁ俺みたいに図書館内をウロウロしている可能性については考慮する必要はないだろう。

ということで待ち合わせ場所の近くの本を立ち読み。
なんか宗教の本みたいだったので少し離れ小説を一冊選び読書開始。今度は待ち合わせ場所の丸いクッション性の高い椅子に座る。長期戦になるかもしれないからという考慮の末。
読み始めた小説は案外面白くタイトルの安直さにくらべて序盤からその小説の世界に入り込めた。話のテンポもよく読みやすい。気がつけばもうそろそろ百ページが近い。区切りのいいところでケータイで時刻確認。現在十一時十二分十二秒。
読むのは遅くないほうだと思うけど。十分ちょいで百ページかまあまあ読めたかな。というか十二分オーバーじゃん。もうそろそろ来るかなぁ。少し憤りながらも再び目線を小説に固定。先ほどの続きから読み始める。　　黙々……。

読み終わったー！！　あいつは何で来ネエッ！！　憤りを抑えて小説の内容を思い出す。いい話だったなぁ。思惑通り和む。作者名は小林千里（コバヤシチリ）、女性作家のようだ。

ちなみに俺のおすすめ作家は双旅優羅（フタタビユウラ）と央平晶人（ナカヒラショウト）。前者は大人っぽい作風で恋愛からミステリほかにも現実的小説がとても面白い。後者はファンタジー、非現実が得意で難しく細かい設定も文章の表現や構成でチャラに出来る文才が魅力。対比して見るのも面白い。

読み終わった時刻十一時三十七分二十秒。もう三十分強遅れてる。まぁ、おかげで良質な小説に出会えたわけだ。など考えながら席を立ち小説を本棚に返す。今度は本は持たずにいったん待ち合わせ場所で待ってみよう。もしかして丁度すれ違いで来てたりして。

案の定だった。

びっくりしたー。さっきまで座ってた丸椅子に待ち合わせ相手が座っている。動揺して少し反応が相手より遅れる。なので先に口を開いたのはむこう。

「おはよう、ゴート」

ゴートは俺のあだ名。名前をもじられて。こいつにとっての十一時四十分はおはようの時間帯らしい。なのでってわけじゃないけどおはようで返す。

「おはよう、明日野」

明日野はこいつの名字。フルネームで明日野渡（アスノワタル）。図書館を多用する文学系少女です。多分。　その明日野は遅刻してきたことは棚に上げ文句を言ってくる。

「待ち合わせの時は待ち合わせ場所でちゃんと待とうよ」

「てめぇに言われたくねぇ！」

即答する。というか反射的に口が動いた。苦笑いするが顔が引きつっているのが自分でわかる。

「てめぇオセーんだよ。何分待ったと思ってんだ！？」

声を荒げてしまう。他の方に迷惑がかかってないといいけど……。

これで今日の奢りはおまえだ、と心の中でつぶやく。これは俺らのルール、どこにでもありそうな。財布がなくても大丈夫な理由の一つ。男が奢ってもらうのはどうかと自分でも思うが、普段は俺から申し出、割り勘。

まぁコイツの家、金持ちだからな～。毎回奢ってもらってもこいつの財布にダメージを与えられない。

明日野は図書館内蔵の時計を見上げ時間を確認する。

「四十分かな？　本一冊読むには丁度イイ時間じゃない？　ゴートにとって」

図星なので反応を抑える。こいつはいつも人の行動パターンを予測してくる。毎回予言者張りにあたるのが許せんが。

明日野はなかなかの秀才でテストでは総合で学年一位と二位を行ったりきたりの優等生（ちなみに俺は中間よりもちょい上）。そのくせ時間にルーズでお金のつかい方も大雑把。お嬢様みたいけど性格はそんなことなくて天然が入っているようでなかなか憎めない。

左目を長く細い前髪で隠し、右目にはカラーコンタクトを入れているらしい。左目に入れているかは不明。身長は低めで華奢。顔はきれいに整っていて散らかっている箇所は見受けられない。可愛いほうだと思う。

何故、優等生で可愛い子と俺みたいなフツーの男子が待ち合わせを行えるかというと、コレは同じクラスだからというのが理由の一つ。そしてもう一つは、硯（スズリ）さんのおかげで硯がいなければこんな優等生さんとの交流なんてもてていませんでした。今回図書館に誘ったのはあちらです。誘っといて遅れるとかさぁ……。

まぁ、そろそろ本題に移りましょうか。今日の本題は本の貸し借りと宿題制覇、昼飯も取って第八回お料理教室（俺の家にて明日野のために）予定。早速、話を切り出す。

「どうする？　もう先に飯食うか？」

どなたかのおかげで遅いしなあ。とは言わない。関係が崩れるとは思わないけど。嫌味はあんまり好かない。
少し考える仕草を行い、間を空けてから答えが返ってくる。
「ん～。十二時半まで粘ろ～か。いいよね？」
はにかみながらの返答。こいつぁ断れない。同意の言葉を述べる。
「オッケー。じゃそれでいこう」
明日野が立ち上がる。そして借りる本を探すために二人で並んで歩き出す。決してカップルを意識したりはしませんよ、とココに断言。いや緊張したりはするけど……いつも明日野のマイペースに振り回されて緊張する余裕がなかったりする。じゃあ一旦、別行動。
俺は、いつも通りライトノベルのコーナーへ。ライトノベル大好き。
ライトノベルのコーナーでは作家が五十音順で並んでいる。その中から『フ』をまず探す。そこから双旅優羅（フタタビユウラ）の小説の最新巻が発売したので探してみるが残念ながら見つからず。他の作家の本も色々探してみる。その途中、余談だが杖を持ったなかなか可愛い子とぶつかった。

結局、選んだのは小説四冊、雑誌一冊。借りられる冊数は十冊。あと五冊借りられるが、特に借りる必要はないと思ったのでそこまでとどめておく。貸し出しの手続きを済ませ待ち合わせ場所に再び戻る。
まぁ、予想通り明日野は不在。時刻は十二時七分三十九秒。あと三十分もしないうちに昼飯だが明日野は戻ってくるのか？　いまだ成長期と思われる俺の体はエネルギーと栄養の確保をおなかを鳴らし要求してくる。
まぁ、いいや、と丸椅子に座り、雑誌をひろげ簡単に目を通す。何の雑誌かって？　もちろん傘の雑誌だよ。残念なことに俺の趣味は周りにあまり理解されない。
柄にもなくぼーっとし、思考を一旦停止する。軽く疲れた。

何も考えないのもいい、と考えながら天井に目を向ける。
少しの間体勢を維持。しかしすぐに飽き、再び視線を雑誌に向ける。
パラパラ適当にページをめくる。今度買う予定の傘を見つけ詳細情報に目を通す。さらに、購入候補の傘の目星をつけバックからメモ帳とペンを取り出しメモをとる。
これ以上読むと借りた意味がなくなる、というところまで読んだところで雑誌を閉じバックに収納する。
あと四分で十二時半ですがどうしましょうか？　来る見込みはないと思う。空腹にも耐えられなくなりそうだし探し出して昼飯をどこかで食べよう。
席を立とうとしたとき、見知った顔がこちらに近づいてくる。
明日野渡だった。
俺の予想は大きくハズレ。珍しい光景を見たような感じがする。実際見たのだろう。こいつのルーズさは学校遅刻クラスだからな。授業は遅れてないけど。
明日野は俺の前で立ち止まり思案顔で尋ねてくる。小首をかしげる仕草が可愛らしい。
「この本とこの本どっちのほうがいいかなぁ？」
どうやら最後の十冊目に借りる本で迷っているらしい。時間を気にしていたわけじゃないということか。一冊は新しく入ったライトノベル。もう一冊はハードカバーでベストセラー作家のミステリー小説。
う～ん、コレだったらハードカバーのほうがいいかな？　と、思いもう一度二冊を見比べる。あれ？　これって双旅優羅の最新刊じゃん。明日野も読んでるのか。うまく言ってハードカバーのほうを借りてもらおう。
作戦開始。
俺はミステリのほうがいいと思うぜ。

「そうかなぁ？」
そうだって。
「う～ん、なんか理由あるの？」
はぁ、単純にそっちの方が面白いそうだからですかね？
「ゴートのことだしなんか裏がありそう」
このタイミングでそんなこと考えますか？
「ゴートにこのライトノベルを借りられたくない理由があるとか……」
な……ないですよ～。単純にミステリーのほうが面白そうだしぃ……。
「でもライトノベルのほうを借りようかな」
待ってぇ～い。勝手に自由に決めるんじゃないよ。
「こっちに決～めた。別に何もないんでしょう？」
ないけど……人の意見も少しは聞こうよ。
くっ！　作戦失敗……無念。

明日野が貸し出しの手続きを終えた後、昼食をとる店を決める。時刻は十二時四十一分五秒。少々粘りすぎた感がある。簡単に話し合い結果近くのファーストフード店を選択。荷物を持ち再び宿題をしに来る図書館を後にする。
図書館から出口の間にあるドア。そこに、傘立てはあるのだが、俺たちの前には俺たちと同世代と思われる制服姿の少女がいて、その少女は傘を持ち出口へと歩を進めて行く。その少女が持っていった傘は俺の傘だった。

参

『ツキアカリ』の代わりに傘立てには『ヒノキツネ』が置いてあった。
『ヒノキツネ』は『ツキアカリ』と同じアレンベナーと言う傘メ

ーカーの傘。形状はかなり似ており始めて見る人なら見分けはつかないだろう。しかし使っていれば小さな違いに気がついてもいいだろう。なんせハンドルについている反射テープが大きく異なるのだ。『ヒノキツネ』の方がかなり光を反射していると思う。コレも俺じゃないとわからないような違いかもしれないが。そして『ヒノキツネ』の方が高価だ。

傘を持ち去られ、かなり動揺している。少しの間、放心……。

そうこうしてるうちに窃盗犯の姿は視界の中に捉えられなくなる。

単純な窃盗ではないようで、間違えて持っていった様子だった。

その時点でようやく、脳からの信号が体の運動神経に伝わる。

もう少女の姿は視界から完全に消え去っている。

「どうしたの？　急に立ち止まって」

明日野の質問に答える暇は無く、脳からの信号に従い、足をフル稼働させる。

「ちょっと！　どこいくの！？」

明日野が声を荒げているが、聞こえない振りをして走り出す。

早く捕らえなければ……

図書館を出たすぐ側にはバス停がある。

丁度その時、間が悪いことに、傘を持った少女はバス停に停留しているバスに乗り込み、ドアは閉まっていくところだった。

全力で走るがバスは出発し目的地に向かいタイヤを回転させる。

間に合わネェッ！

しばらく追いかけるが、無情にもバスは俺から逃げていくようにその姿を消す。

「チクショ、早く、ハァ、探さねーと」

短距離で予想以上に息があがり、肩が激しく上下する。

「ちょっと、ゴート！　どうしたの？」

遅れ馳せながらも明日野が追いつき、当然と言える質問を投げか

ける。
「傘が……ふぅ、ちょっと待って……」
時間をもらい、息を整える。
「さっき、俺達の前、歩いてた女子いたじゃん」
一旦会話を切り、反応を待つ。実際は呼吸がまだ不安定。
「えとぉ、そーえばいたね」
会話の成立を確認し、続ける。出来るだけ短く、的確に。
「その子の持っていった傘が俺の傘だった」
明日野は納得したようで、ついでに集中力の切れた、俺の心の中も読んでくる。
「なるほどね、ゴートにとっては大惨事なわけだ」
軽く言ってくれる。早く探さねーといけねえのに、異様にまったりしたペースで会話は進む。
「だから、早く探さねーと」
心の中の焦燥を出来るだけ、外に出さないように努める。
「あー、あの子の制服見たことあるかも」
この場においてはほぼ、決め手となるような情報を明日野は与えてくれる。
「マジか！？　どこの学校のだかわかるか！？」
つい声を荒げ、落ち着き無く聴収を行う。だが明日野は動じず、落ち着き払った振る舞いを見せる。流石、腐っても優等生と言うわけだ。
「えっと、友達に確認とるからちょっと待って」
そういって、明日野は俺から少し離れ、ポケットから携帯電を取り出し、コールを始める。
少し遠くに明日野のくっきりした声と、電話した相手の声が極小レベルで聞こえる。盗み聞きはしない方向で行こうと思うので、会話から意識を引き剥がす。
会話の間、少女が乗ったバスの行き先を思い出す。
簡単に推測を立て周辺の建物の配置、考えうる住居を思い浮かべ

る。しかし、秀才、明日野には及ばず、
「よしっ、大体予想ついたよ。いくつかまわったらわかるから、二手に分かれよーよ」
すばやい判断力、思考能力どこを取っても俺に劣ることは無く、普段のおっとりした具合からは予想も出来ない思考回路、頭の回転。
こんな、傘マニアのわがままに付き合ってもらえるとは、とても喜ばしい。
「場所は、どのあたり？」
いち早く行動しようとすぐさま確認をとり、次の行動に備える。
「五つ目の停留所より先に、その学校の生徒は住んでいないって話だから、それよりも前で七件の内のどれかだと思う。私は西側の三件あたるから、ゴートは東側四件お願い」
多分、俺のために必死になっていると言うか、そういうのは、忘れているんじゃないかな？　明日野ならありえない話ではないだろう。
俺達二人は住所を確認し走り出す。いや、走り出したのは俺だけだが。明日野はバスを待っている模様。
まだ雨は降り続いている。俺は傘を差さず走り続ける。

冒頭　プロローグ（後書き）

初投稿で初めての小説ですが小説とは認められないかもしれない作品です。
まだ中途半端ですがこれから皆さんの悪評でも何でも吸収して成長していきたい次第です。
非現実物は難しそうなので日常物でまずは。
こんな途中半端な作品を投稿してよろしいかわ解かりませんがいろいろ文句でも何でも言ってもらえるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6840k/

ユニラブ

2010年10月24日05時47分発行